

情報教育の鑑^{かがみ}

麗澤大学外国語学部准教授
千葉 庄寿

牧野先生との出会いは平成13年2月にさかのぼる。外国語学部の情報科目担当教員として4月に赴任にするにあたり、麗澤大学を訪れた私に対応してくださったのが牧野先生であった。それ以来、そして今でも、牧野先生は私にとって「情報教育の鑑」であり続けている。

「コンピュータ・リテラシー」（経済学部の現在の科目名は「情報科学A」）のコーディネータとして、また情報システムセンターに所属する教員として牧野先生と一緒に働くようになってから、初めてお会いした時に頂いたアドバイスが、先生の情報教育に対するスタンスそのものであったことを、私は折に触れて気づくことになった。生前、ちゃんとお伝えする機会があったかどうか分からない感謝の気持ちを込めて、以下に記しておくことにする。

(1) 完璧な教材ではなく、よりよい教材を目指せ：新しい仕事の責任の重大さに半ば呆然としていた私に、牧野先生は「実際に教えながら、少しずつよい授業にしていけばいいんです。そしてその努力こそが大切なんです」と話してくださった。

牧野先生は、実際、教材と教育の質の確保に非常に敏感であった。「情報システムの全体像については自分が最も把握しやすい立場にいるから」と、コンピュータ・リテラシーの初回で使う導入資料は牧野先生ご自身が用意され、そこには、教員がおこなうべき説明事項がひとつひとつ細かく書き込まれていた。大学の情報システムを使用するにあたって理解すべき情報リテラシーは、全ての学生が確実に理解しなければならない、という信念を、我々教員はひしひしと感じ取ったものだ。

(2) 教えるべきことは常に変わっていく：私の書いた拙いシラバスを読み、実際に教えるべき内容はどんどん変わっていくものですよ、とコメントしてくださり、「常に最新動向を取り入れて柔軟に教材などの見直しをおこなっていく」という一文を加えるよう提案してくださった。学生向けというより、教師の「心意気」に関するアドバイスだったかもしれない。今でもこの文言は外国語学部の「コンピュータ・リテラシー」のシラバスに残してある。

(3) 情報は共有せよ：私の前任の先生が残された授業資料を確認しながら、「両学部で開講されている科目ですから、シラバスはできるだけ共通にし、教材も共有しましょう。何もない状態から始めるわけではないのですから、大丈夫ですよ」と励ましてくださった。両学部でシラバスの大部分を共有する現在の「コンピュータ・リテラシー」の体制はこうして作られたといえる。

「新しいことを立ち上げたり、抜本的な改革を断行したり、というのは僕の性に合わないんだよね。今回、僕はこれまでの体制を整理する役に徹しようと思う。それが終わったら、本当の意味で教育に集中したいね——」。翌年度から情報システムセンター長という大任をお引き受けてくださる予定だった先生が、亡くなる少し前、私にこんな声をかけられた。オーバーワーク気味の情報システムセンターを自分が変えるのだ、という強い使命感とともに、多忙のなかでままならない教育への思いが覗いていた、と今改めて思う。そして、残されたご遺志が「情報システムセンターをよりよい組織へ」「時代や情勢の変化に対応した組織へ」「情報の共有と役割分担を」という、先生の情報教育へのスタンスに相通じるものであること、そしてその遺志を継ぐ担い手として、我々が牧野先生から学んだことの大きさに、今改めて気づかされるのである。